軽量培土によるイチジク‘桝井ドーフィン’のポット栽培技術			
[要約] イチジク‘桝井ドーフィン’を、馬糞チップ堆肥ともみ殻くん炭を混合した軽量培土を用いて雨除けハウスでポット栽培することにより、定植1年目から収穫が可能で、2年目から4年目まで1ポット当たり平均4.5kg（3.6t/10a）の高い収量が得られる。			
農業技術振興ｾﾝﾀｰ・花・果樹研究部・果樹担当		**[実施期間]** 平成18年度～平成22年度	
[部会] 農産	**[分野]** 高品質化技術	**[予算区分]** 県単	**[成果分類]** 普及

[背景・ねらい]

イチジクは県内での栽培が増加しており、今後も面積拡大が見込める有望な品目である。また米価の下落や農政が変化する中で、水稲との複合経営品目としてイチジクに対する関心が高まっている。しかし、ネコブセンチュウが寄生するため、果菜類等野菜栽培跡では栽培を推進することができない。また、既存産地では土壌病害が発生しており、ハウス栽培であるが故に圃場の移動が難しいといった実情がある。

そこで、集落営農組織や稲作農家が新たな複合品目として取り組みやすく、また既存のイチジク生産農家も改園対策として導入しやすいイチジクのポット栽培技術を開発する。

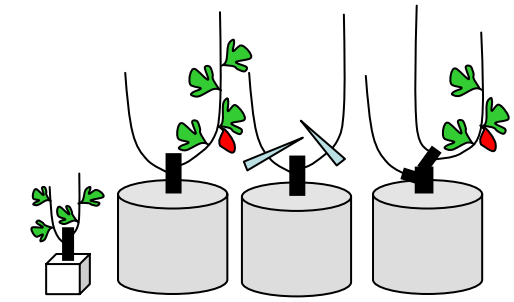
[成果の内容・特徴]

① 馬糞チップ堆肥ともみ殻くん炭を約1：1で混合した培土20Lを用いた小型ポットにおいて、安定的なイチジク生産が可能である（図1）。
② ポット重量は、剪定後に1人で移動可能な重さである（図2）。
③ 収量は、1ポットあたり定植1年目に約600g、2年目以降は平均して4.5kgが得られた。また、2年目以降の平均果実重は約100gであった（表1）。
④ 施肥量は年間窒素成分量で25～30gとし、IB化成を用いて月1回分施することが適当である（表2）。
⑤ 5月上旬に140日タイプのリニア型被覆肥料を用いることで、IB化成を分施した場合と同等の収量が得られ、以降の施肥を省略することができる（表3）。

[成果の活用面・留意点]

① ポットが軽量で容易に移動可能であるため、水稲育苗ハウスの遊休期間を活用することが可能である。
② 水稲育苗ハウスを使用した場合、2月から5月中旬にハウス外へポットを出しているため、収穫時期は露地と同時期の8月中下旬から10月下旬となる。
③ 自家育苗の方法については、平成20年度主要研究成果「イチジク‘桝井ドーフィン’のロックウール挿し木法による大量育苗」を参照。
④ ポット栽培においては、根詰まりによる樹勢低下が生じやすいので、定植4年目を目処に更新していくことが望ましい。

[具体的データ]



列間 2m×株間 60cm とし、10a あたり約 800 ポットを設置。
馬糞チップ堆肥ともみ殻くん炭を培土とし、培土量は 20L。
定植 1 年目は 2 本の新梢を結果枝とし、2 年目から
結果枝を 3 本とする。

図1　栽培の流れ

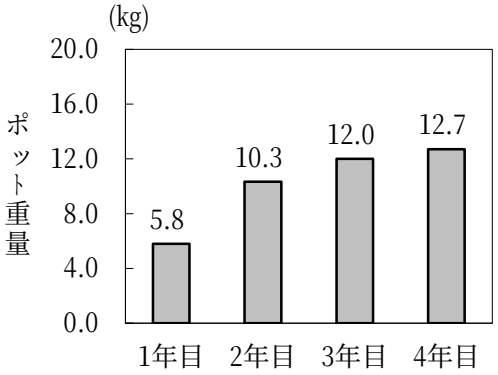


図2　剪定後ポット重量の推移

※定植 3 年目の 4 月に、各ポットの上面に 5L の客土を実施した。

表1　収量および果実品質の推移[z]

	収量（kg/樹）	収穫果数（個/樹）	果実重（g/果）	糖度（Brix%）	着色[y]
2007（定植1年目）	0.6	10.5	60.6	17.6	—
2008（定植2年目）	2.8[x]	28.3	100.3	13.9	3.7
2009（定植3年目）	5.5	55.0	100.7	14.8	3.6
2010（定植4年目）	5.1	51.6	98.9	16.4	3.7

z:定植1年目は50g以上の果実、定植2年目以降は60g以上の果実を調査対象とした。
y:果皮の着色は、着色割合を5段階（0～5）で評価した。
x:2008年は、水分ストレスにより幼果の落果が発生した。
　2009年以降は、ポットを反射シートで覆うことにより、同様の被害はみられなかった。

表2　施肥量の違いが収量および果実品質に与える影響

年	試験区	施肥成分量(g/ポット)[y]			収量	果実数	果実重	糖度	着色
		N	P_2O_5	K_2O	(kg/樹)	(個/樹)	(g)	(Brix%)	
2009	減肥区	19.0	19.0	19.0	5.1	53	97 c[z]	14.8	3.6
（定植3年目）	標肥区	25.0	25.0	25.0	5.5	55	101 b	14.8	3.6
	増肥区	31.0	31.0	31.0	5.7	54	106 a	14.8	3.6
2010	減肥区	19.0	19.0	19.0	4.8	54	89 b	16.1	3.7
（定植4年目）	標肥区	25.0	25.0	25.0	5.1	52	99 a	16.4	3.7
	増肥区	31.0	31.0	31.0	5.2	51	102 a	16.3	3.7

y:IB化成S1号を4月から10月に月1回分施した。
Z:Tukeyの多重比較検定により異符号間に5%水準で有意差有り。

表3　被覆肥料の利用が収量および果実品質に与える影響

年	区	施肥成分量(g/ポット)			収量	果実数	果実重	糖度	着色
		N	P_2O_5	K_2O	(kg/樹)	(個/樹)	(g)	(Brix%)	
2009	被覆肥料区[z]	25.2	20.8	24.8	5.4 n.s.[x]	50 n.s.	107 *	15.0 n.s.	3.4
(定植3年目)	IB区[y]	25.2	24.0	24.8	5.9	56	105	14.8	3.6
2010	被覆肥料区	25.0	20.8	24.8	6.1 n.s.	55 n.s.	110 *	16.6 *	3.8
(定植4年目)	IB区	25.0	25.0	25.0	5.7	55	104	15.7	3.7

z:被覆肥料区は、4月に燐硝安加里S604またはIB化成SI号を施用後、5月にエコロング424-140日タイプを157g施用。
y:IB区は、4～10月にIB化成S1号250gを月に1回分施。
x:t検定により、*は5%水準で有意差あり、n.s.は有意差なし。

[その他]

・研究課題名

大課題名：消費者等の多様なニーズに応える高品質・高付加価値化技術の開発
中課題名：果樹の高品質・生産拡大に向けた栽培技術の開発
小課題名：誰もが取り組みやすい果樹栽培技術の確立

・研究担当者名：中井洋子（H20～H22）、小嶋俊英（H18、H19）

・その他特記事項：